

尾張徳川家の雛まつり

平成31年2月9日(土)~4月7日(日)

主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫
中日新聞社
協力 名古屋市交通局



かねひめ 矩姫さまの雛人形・雛道具

矩姫(貞徳院・1831~1902)は福島・二本松丹羽家10代長富の三女として生まれ、嘉永2年(1849)に慶恕(後の尾張徳川家14代慶勝)にお嫁入りました。

矩姫の雛人形は、束帯姿三対・直衣姿一對・狩衣姿一對の有職雛(公家の装束を正しく考証して作られた雛人形)で、高さはおよそ30センチあります。当時製作された大名家のお雛様のなかでも、ひときわ格調高い作品です。

内裏雛飾り

有職雛(束帯姿・直衣姿・狩衣姿) 五対
五人囃子(雅楽) 一揃
犬張子 二対



さまざまなお人形と雛道具

矩姫が所持した小さな雛人形です。幕末に、将軍家や御三家では、雛飾りが大奥の2~3箇所にしつらえられたといわれています。この人形たちの箱には「御内証」の貼札があり、プライベートな場で飾られたと考えられます。

また、矩姫の妹でのちに尾張家15代となる茂徳の正室、崇松院政姫が作ったとされる豆賀茂人形はじめ、さまざまなお人形を公開いたします。

有職雛(衣冠姿・直衣姿・小直衣姿・狩衣姿) 五対
七人囃子(雅楽)・三人官女・隨身 一組
豆賀茂人形 一組
鉄線唐草蒔絵懸盤 一式
鉄線唐草蒔絵碁盤・将棋盤・双六盤 個人蔵 一式
犬張子(犬筥) 名古屋市・建中寺蔵 一対

ぼたんからくさまきえ 牡丹唐草蒔絵雛道具

定かではありませんが、もとは11代将軍徳川家斉が日頃愛玩した雛道具で、のちに故あって矩姫の所持するところとなったと伝えられています。

貝桶 懸盤 御所車 乗物 冠台
見台 碁盤 将棋盤 双六盤 など

さちぎみ

福君さまの雛道具

五摂家の筆頭・近衛家から尾張徳川家11代齊温なりはるに嫁いだ福君しゆんきやういん(俊 恭 院・1820~40)の雛道具を公開いたします。



きくおりえだまきえ

菊折枝蒔絵雛道具

梨子地に菊の折枝を配し、所々に近衛家の家紋である抱牡丹紋と徳川家の葵紋を散りばめたデザインを施し、金具にはすべて銀が用いられています。福君の婚礼調度として伝来する、等身大の菊折枝蒔絵調度の諸道具と遜色のない精巧な出来映えを示しています。



長持 緋傘 茶弁当 文台・硯箱
見台 櫛台 源氏筆筒 乗物 など

だき ぼ たんもんちらしまきえ

抱牡丹紋散蒔絵雛道具



「菊折枝蒔絵雛道具」とともに、福君が所持した雛道具です。梨子地に金貝かながいと蒔絵によって、近衛家の家紋である抱牡丹紋を配し、金銅製の金具を打っています。菊折枝蒔絵雛道具と比べ寸法に多少の違いが認められますが、豪華さと格調の高さに独特の趣きがあります。

厨子棚飾り 黒棚飾り 書棚飾り 台子皆具・茶坊主人形
湯桶・盥 炭斗 広蓋 葛籠 など



<特別公開>

中村家寄贈のお雛さま



これまで所用者が分からなかった雛人形・雛道具ですが、近年の研究によって、天保7年(1836)に近衛家から齊温に嫁いできた福君さちぎみが持参した雛人形・雛道具一式と推定されました。人形の装束や冠えいの纓を収納する畳紙たとうには「陽明家ようめいけ」(近衛家)の墨書があり、女雛の表着に近衛家の家紋である「抱牡丹紋だきぼたんもん」が織り出されています。男雛の袍や随身の狩衣ほろは尾張徳川家11代齊温なりはる(1819~39)の異母兄にあたる12代将軍家慶いえよし(1793~1853)のために織られた裂地と同じ色目と文様であり、福君が持参したのちに、将軍ゆかりの裂地きれじを用いて新調されたと考えられます。

また、昨年中村家よりご寄贈いただきました、福君さちぎみが持参した雛人形・雛道具と一緒に同家の雛まつりで飾られていた雛道具・人形を初公開いたします。



尾張徳川家 三世代にわたる雛段飾り



徳川美術館の創始者である、尾張家19代義親よしちかの夫人米子よねこ(1892~1980)、20代義知よしともの夫人正子まさこ(1913~1998)、そして21代義宣よしのぶの夫人三千子みちこ(1936~)の三世代にわたる尾張徳川家の雛段飾りです。数組の内裏雛を上段にすえ、三人官女・五人囃子をはじめ、節供の祝儀としてさまざまな方々から贈られた御所人形・毛植え人形などの人形、さらに多種多様の道具揃えが並べられ、江戸時代以降の大名家の雛段飾りのありかたがよく示されています。

高橋博子ひろこさまの内裏雛飾り

尾張家20代義知よしともの次女・高橋博子ひろこさま(1938~)愛蔵の内裏雛飾りです。雪洞ぼんぼりや懸盤かけばんなどの雛道具には、二葉葵の文様があしらわれています。

秩父宮妃殿下ご遺愛のお雛さま

秩父宮妃殿下ちちぶのみやひでんか勢津子せつこさまは、幕末に活躍した会津松平かたもり容保の孫で、昭和3年に秩父宮雍仁親王やすひととご結婚されました。妃殿下ご遺愛のお雛さまは妹の尾張徳川家20代義知夫人正子まさこさまに贈られました。男雛の冠は立纒りゆうえいで、装束は天皇にのみ許される黄櫨染こうろぜんの上衣を着用しており、皇室にふさわしい格式のある雛飾りです。

市松人形

昭和2年(1927)の春、アメリカから日本の子どもたちへ、13000体にのぼる、いわゆる「青い目の人形」が贈られました。そのお返しとして、日本の子どもの募金によって、58体の市松人形どうれいにんぎょうがその年のクリスマスに贈られました。この市松人形は答礼人形贈呈の大役を担った、当時のアメリカ大使松平恒雄氏の娘で、のちに尾張家20代義知夫人となった徳川正子が愛したお人形です。答礼人形の作者の一人、瀧沢光龍齋によって特別に作られました。



合あわせ貝がい

貝合わせは蛤の身と蓋を合わせる遊びです。二枚貝は特定の一片としか合わないため、合貝とそれを納める貝桶は、貞節の象徴として婚礼道具の中で最も大切にされました。

- 合貝 菊折枝時絵貝桶附属 俊恭院福君(尾張家11代齐温継室)所用 江戸時代 19世紀
- 合貝 武蔵野時絵貝桶附属 徳川義直(尾張家初代)・京姫(義直娘)ほか筆 相応院(尾張家初代義直生母)所用 江戸時代 17世紀

用語解説

黒棚(くろだな) Kurodana

厨くりやだな棚(台所棚)から発生したといわれ、室町時代に厨子棚と共に成立した。主に女性の化粧道具を飾る。厨子棚と同じく四段の棚からなり、二と三の棚の間に局つぼねがある。

厨子棚・黒棚・書棚をあわせて三棚という。室町時代には厨子棚・黒棚の二棚の組合わせであったが、江戸時代初期に書棚が加わり、婚礼調度には三棚を一組として扱うようになった。

書棚(しょだな) Shodana

厨子棚・黒棚が室町時代に形式が定まったのに対して、書棚は江戸時代初期になって婚礼調度に加えられた。飾り付けには特別な決まりがなく、冊子や巻物を飾る。形態や大きさも幾分自由であり、最下段には二本引または四本引の引戸が付く。

厨子棚(ずしだな) Zushidana

平安時代の公家の調度であった二階棚と二階厨子が変化して、室町時代に成立していたといわれている。手箱・香道具・硯箱などを飾る。上段から一の棚・二の棚・三の棚・四の棚の四段からなり、一の棚は左右の両端が端反りである。二と三、三と四の間の二箇所に観音開きの扉がつか局つぼねがある。

挟箱(はさみばこ) Hasamibako

外出の際に必要な衣類・調度・装身具を納めて従者に担がせる箱。方形で被蓋造かぶせふたづくり、棒を蓋の上に通して肩に担ぐ。近世の武家独自の旅行用具。語源は昔、衣服を竹に挟んで運んだためという。大名行列で先頭を挟箱が行く場合は、先箱とも呼ぶ。

伏籠(ふせご) Fusego

格子状の方形の箱形、または棒を緒でつないで組んだ柵状で、これに衣服をかける。中に香炉を入れ、衣服に香をたきこめるために用いる。

長持(ながもち) Nagamochi

衣服・調度などを納める長方形の大型の箱。吊り金具が両端に付き、棒を通して前後二人で担ぐ。大中小の大きさがあり、数も数個以上揃えられた。

耳盥(みみだらい) Mimidarai

半球状の盥で、左右に耳状の把手とってが付く。歯黒染の際に用いられ、渡金はぐるを耳盥の口縁に渡し、その上で鉄漿わたしかね(お歯黒の墨)を溶く。

広蓋(ひろぶた) Hirobuta

元来は衣服を入れる箱の蓋の転用であったが、発展して身は作られず衣服用の大型の盆として作られるようになった。また衣服に限らず贈答品や客人へ供する物品なども載せる。

椽・角盥(はぞう・つのだらい) Hazō and Tsunodarai

角盥は半球状の盥に四本の角状の手が付くところからこの名称がある。二人でこの手をもって運ぶのに便利な構造で、水差しの椽と一対をなす。

行器(ほかい) Hokai

「ほがい」とも読み、外居とも書く。食物を入れて運ぶ容器。通常は二個一対。外反りの四脚が付く、円筒形と四角柱形がある。身と蓋を紐で結び、棒を通して担ぐこともある。

指樽(さしだる) Sashidaru

酒を入れる箱形の容器。上部に注口をつける。